

琉球大学学術リポジトリ

観光景観の生産：観光景観学の成立のために

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科 公開日: 2017-02-24 キーワード (Ja): 観光, 景観研究, 生産, 文化的景観, 金瓜石鉱山 キーワード (En): Tourism, Landscape Study, Production, Cultural Landscape, Kinkaseki Mine 作成者: 波多野, 想, Hatano, So メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002008524

観光景観の生産 観光景観学の成立のために Perspective for Production of Tourism Landscape

波多野 想*
So HATANO

This paper is to discuss the productive phase of landscape through tourism with the case of the Kinkaseki Mine where was developed during the period Japanese occupied, and being touristic places since 1990s. For this paper, landscape is not only material things, but also simultaneously constitutions through social, cultural, and political process including the term struggle, strife, impingement, conspiracy, and negotiation. Tourism is also one of term for studying landscape as productive constitution. In some papers, tourism seems to be a consumption of landscape. It seems to me, however, that landscape is formed and reformed through negotiation between local residents and tourist, such as a preference, a demand, a recommend, tour route with the tactics of residents, and so on. In this perspective, it is of importance that landscape is not a result of human activities and not out of social and cultural process, but it is perpetually changed or transformed by daily life of residents, tourism activities and correspondence to this.

Key words

観光 景観研究 生産 文化的景観 金瓜石鉱山

Tourism, Landscape Study, Production, Cultural Landscape, Kinkaseki Mine

1. はじめに

2004年は、日本の景観にとってひとつの大きな転換点となった。まずひとつに、文化財保護法の一部改正によって、文化的景観が新たな文化財保護の手法として導入された。また同年、景観法が公布され、「良好な景観の形成を促進する」ための制度が整備された。これらによって、法律用語としての「景観」が一般に注目されることになった。それから10数年が経過しているが、景観の捉え方が学問分野によって異なるのはさることながら、文化遺産においても文化的景観の捉え方やマネジメントの仕方が常に議論されている。奈良文化財研究所が文化的景観学検討会を立ち上げ、文化的景観学の成立を目指して精力的に活動しているのはそのひとつの現れといえる。

ところで、景観とは、田畑、家々、電柱、道路、森林、河川など、ある空間に存在する多様な物質的要素を、客観的な存在としてのみ扱うものではない。むしろ、そのような物質的存在としての景観がある一方で、そこに社会的意味や文化的意味が込められていることを重視し、景観を物質性と社会性や文化性を同時に併せ持つ両義的存在と考えるようになってきている¹⁾。この点については、文化財保護の手法として導入された「文化的景観」においても同様で、それは保護対象として物質的景観に限定せず、「地域の見方」として定着しつつあるとあってよい(文化的景観学検討会、2016)。

他方で、観光とは、一義的に定義できるものではないが、ある地域に所在する名所や旧跡を見てまわったり、あるいは自身の住所を離れ一定期間ことなる場所に滞在することを含む点では異論ないだろう。ここでいう「地域」や「場所」がまさに観光地であり、そこで来訪者によって実践される行為は、当該「地

*琉球大学大学院観光科学研究科

域」「場所」に少なからず影響を与える。その影響は物質的には、来訪者が見ることを期待する名所や旧跡の周囲に道路やトイレが整備されたり、来訪者が滞在するための民宿やレストランが開業されたりすることに端的に表れるだろう。また社会的あるいは文化的には、まさに来訪者が「好む」名所の周囲を優先的に整備したり (D. マキヤーネル、2012)、来訪者の出現が地域住民の生業やライフスタイル、さらに地域生活に対する考え方などに影響を与えるだろう。これらの影響の実態を物質的側面と社会的・文化的側面の両者から同時に明らかにすることが、まさに景観を対象とする学問に与えられた課題であるといえる。

本稿は、観光地の景観整備ではなく、観光者、地域住民、商店主など観光地の形成に関わるアクターの多様な行為が(再)形成する景観、さらには景観によって惹起するアクター間の行為、に焦点を当てその実態を明らかにする学問としての「観光景観学」の可能性を論じるものである。本稿においては特に、歴史的に形成された景観、なかでも日本による統治下で開発された金瓜石鉱山の文化遺産化と観光地化を例に論を進める。

2. 文化的景観という見方

文化的景観とは、人々の日常的営みや社会的諸活動が地域の自然や文化の中で積み重ねられ具体的に形成され、また人々によって知覚されるものである (本中眞、2009、9)。換言すれば、文化、社会、経済、政治、信仰など非視覚的な要素に影響を受けつつ具現化されると同時に、それらの要素を通して認識されたものを文化的景観という。

2004年に改正された文化財保護法の第2条において、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」(e-Gov、2016年5月9日閲覧)と定義され、さらに同法134条で、「文部科学大臣は、都道府県又は市町村の申出に基づき、当該都道府県又は市町村が定める景観法(平成十六年法律第百十号)第八条第二項第一号に規定する景観計画区域又は同法第六十一条第一項に規定する景観地区内にある文化的景観であつて、文部科学省令に定める基準に照らして当該都道府県又は市町村がその保存のため必要な措置を講じているものうち特に重要な物を重要文化的景観として選定することができる」(e-Gov、2016年5月9日閲覧)と重要文化的景観の選定について規定している。ここで重要なことは、「地域」の生活、生業、風土によって形成されたものを文化的景観と呼び、「地域」(都道府県や市町村)の申出によって重要文化的景観としての選定手続きが開始される点である。

「地域」の生活は、自然環境が異なれば自ずと違ってくるし、言うまでもなく時代によっても変化する。「地域」の生業の形態は、例えばそれが農林漁業のように技術革新の影響を受けるようなものであれば、当然に変化する。また「地域」の主要な生業自体、社会的要請によって異なるものに転化する可能性がある。ある農業地域を来訪する観光客が増加すれば、農業から観光客を相手とした商売へ生業を転化する人が出てこよう。あるいは例えば、筆者が調査研究のフィールドとしてきた台湾・馬祖島や金門島は、1949年以降、中国大陸に対する中華民国側の軍事的な前線基地としての機能を担わされてきた。そのなかで、農業や漁業で生計を立ててきた地域住民は、民兵としての役割を強要されると同時に、居留する軍人たちのためのレストランを開業したり、彼らの生活に必要なクリーニング店を営むようになるなど、住民の数に対する圧倒的な数に及ぶ軍人の存在が、住民の生業を変化させた³⁾。馬祖島や金門島の事例は極端なものと言えるが、いずれにせよ時代的要請等に基づいて生活や生業が変わり、それによって景観が「変容」ないし「変化」することは確かである⁴⁾。

社会人類学者のインゴールドは²⁾、景観(landscape)とは陸地(land)でも自然(nature)でも空間(space)でもなく、長い年月をかけて展開する物語のようなものであり、人々と周辺環境の間で実践される相互

作用の継続的なプロセスそのものであるという (Ingold, T., 1993, 152-174)。そのインゴールドの視角は、景観を「文化的イメージ、環境を表象するための絵画的な手法」とみなすコスグループらに対する批判として提示されたものであり、その批判は彼らが文化を、テキスト、イメージ、サイン、シンボル、表象、ディスコースなどの非物質的存在にとっての本質と理解する点に向けられたものであった (Wylie, J., 2007, 153-157)。そしてインゴールドは「居住 (dwelling)」の視点から、「景観は、そこに居住する人々や、その場所に滞在する人々、その場所に繋がる経路に沿って旅をする人々によって知られる世界であり (Ingold, T., 1993, 152-174)、景観がもつ形態はそこに過去に居住していた人々による生活および仕事の永続的な履歴によって構成されるものであることを明らかにする。

またインゴールドは、「時間性 (temporality)」という概念を手がかりに、景観における過去、現在、未来の相互浸透を追究する。インゴールドによると、「時間性」は過去の出来事を年代順に並べた年表でなく、また歴史でもない。むしろインゴールドは、マクタガート (J. McTaggart) の時間に関する論を展開させたジェル (A. Gell) による時間の A 系列と B 系列に関する議論を踏まえ、出来事の連なりに時間が内在するとする A 系列において、現在の出来事が過去の事象を保持しており、それを包含しつつ未来へと向かっていくとする。とすると、現前する景観には過去、現在、未来が相互に関わりをもつ状況が具体化され、その状況が人々の社会的行為による経験を通して時間性と歴史性をつなぎ合わせることになる。したがって、出来事の過去-現在-未来における相互浸透の関係性は、景観においてはそれ自体が持続性とみなされる。換言すれば、景観の物質的次元においては、過去の要素、現在の要素、未来の要素が相互に規定し合う関係が存在し、その相互規定性こそが景観の特徴を形作っているといえる。だからこそ、アーリ (J. Urry) がインゴールドの論を手がかりに、コミュニティにおいて世代を超えて堆積してきた道のネットワークが新たに建設された街道によって飲み込まれるとき、それにともない人々の環境における営み⁵⁾は破壊され、その消滅を街道が埋め合わせることはない (アーリ、2006、238)、と述べているのは街道の建設が時間を越えて存在する要素の相互規定性に混乱を生じさせていることを批判的に捉えたことを意味する。

したがって、ここで重要なことは、景観を過去や現在の一瞬における様態として切り取るような静的な、あるいはあたかも景観が不変であるかのように捉えるのではなく、むしろあるタスクの進行過程における絶え間ない移り変わりとして把握していくことである。景観の形態が人々の生活に先立ち準備されていることは当然ながらあり得ない。その景観の形態はそれを形作る「居住」のプロセスそのものなのであり、したがって、景観は常に進行過程にあるという性質をもつ (Ingold, T., 1993, 152-174)。ゆえに、過去-現在-未来の事象が景観において相互浸透していると考えることで、ある景観の特徴を明らかにすることができるのである (波多野、2016)。

景観はパリンプセスト (palimpsest) になぞらえて表現されることがある⁶⁾。パリンプセストとは、古代・中世のヨーロッパにおいて、羊皮紙などにすでに書かれていた文字を消して新しく書かれた古文書のことをいう。新たに文字を書き記す際、不要とみなされた文書を消去し上書きした。元の文書は肉眼では判別しがたいものの、その痕跡がまったくなくなるわけではない。同様に、各時代の社会は、その時代の経済的状況や社会情勢、技術の進歩を通して、前の時代に構成された要素を消去しそれを新たな要素によって置き換えようとする。しかし言うまでもなく、前時代の要素がすべて新しいものに置換されることはない。むしろ複数の時代の要素が重層的に折り重なってひとつの空間に収まっていることに現在社会の特徴を見出すことができる。その特徴が空間に反映されたものが景観であるといえる (Palang, H. and Fry, G., 2003, 1-13)。また、異なる時代に形成され同時代に存在する景観要素は各々独立しているわけではない。それらの要素がある時代の要請に基づいて存立している以上、要素同士は何かしらの関係性をもって存在している。したがって、一つの要素が変わることは、他の要素に影響を及ぼし、さらには

景観の全体的特徴が変わることを意味する (Antrop, M., 1997, 105-117)。

3. 景観の「消費」論と「生産」論

景観の形成や変容・変化を、その背景にある出来事による景観要素の消費と捉えるか、生産と考えるかで、景観理解は大きく異なる。ここでは、景観に対する消費的視点と生産的視点をもたらす景観理解の相違について考えていきたい。

景観の消費論として、ここではダンカンらによる「景観テキスト論」(Duncan, J. S., 1990) やコスグループらによる「景観表象論」(Cosgrove, D. E., 1984) が挙げられよう。また景観の生産論としては、先に挙げたインゴールドの「タスクスクープ論」(Ingold, T., 1993, 152-174) やシェインの「景観の規範的次元論」(Schein, R. H., 2003, 199-218) が挙げられる。

前者の立場による研究は、「観念論的価値の支持者としての景観の役割を効果的に暴く一方で、景観の生産という視点を通してそのプロセスについて語ることはまれである」(Wylie 2007: 102)。それはより具体的に言えば、景観がいかにかに為政者の権威を表象しているか、あるいはその景観に生きる人々がいかに為政者の空間形成「戦略」⁷⁾に馴致されているか、というように、現前する(あるいは歴史的に存在した)景観が政治的ないし社会的に消費される点に焦点をあてたものと言える。そのため、ミッチェルは、「景観テキスト論は、景観を文化的価値の結果と反映と理解する」とし、景観の生産的側面を無視している点を批判する (Mitchell, D., 1994, 7-30)。景観テキスト論のように景観を完成したものと捉える視点は、ある(例えば政治家の)観念を表象し、時に擁護する役割を景観が担っていることを効果的に明らかにする点で有効である。しかしその一方で、そうした視点においては、景観が創造、生産されるということを通してそのプロセスについて議論することに欠けていると言わざるを得ない⁸⁾。

それでは、なぜ景観の生産的側面に着目する論者は、それが必要であると考えているのであろうか。

前章において、インゴールドの論を手がかりに、景観の物質的次元において、過去の要素、現在の要素、未来の要素が相互に規定し合う関係が存在し、その相互規定性こそが景観の特徴を形作っていると述べた。「生産」論者からすれば、過去、現在、未来の相互浸透に基づく異なる時期に形成された要素の相互規定性に景観の質を解明する鍵が存在する。そこでは時間の絶え間ない相互浸透が前提とされており、したがって、景観は常に、そしてほぼ無限に変化する特徴を先験的に有する。そのため、景観の生産的側面に焦点をあてた研究は、「景観の生産において進行中の社会的、経済的諸関係に着目したもの」(Wylie, J., 2007, 106) であり、そこでは景観は「常に生産の途上にあり、変化、改変、異議申立に開かれている」(Wylie, J., 2007, 106) ことになる。

景観の規範的次元に着目したシェインは (Schein, R. H., 2003, 202)、『景観は人間活動の結果である』(中略) とする経験主義的伝統は、景観自体を社会的、文化的プロセスの外側に置き去りにする」と批判し、景観が社会における人々の日常的実践と不可分に存在し得ないことを示した。その上で、景観を、人間活動の諸活動の結果とみなすのではなく、むしろ「物体」であると同時に世界の概念的構成であり、社会的、文化的プロセスの重要な一部分とみなすべきであるとする。そこで景観は、社会的諸関係を馴化あるいは具体化、さらには規範化するのに役立つことになる。すなわち、場所とアイデンティティの生産と再生産における核心的課題が、景観の規範的次元にある。

これらの研究が明らかにしている通り、景観の生産的側面に着目することで、景観を「結果」としてとらえることでは獲得し得ない異議申立の機会確保の可能性が立ち現れる。社会的、文化的規範が景観に具体化されるプロセスを追うことで、景観に対する批判的視角を確保することができるとも言える。

4. 観光景観論の現在

観光は風景の消費とも言われる。果たしてそうだろうか。観光客によって、当該観光地の風景や景観は消費されているだけなのだろうか。

Knudsen (2008, 1-7) らは、「観光景観 (tourism landscape) は、長年にわたる社会的構築物の最終結果である」と述べ、さらに、「内部者 (受入社会) の観念と外部者 (観光客) の知覚、および彼ら/彼女らの解釈の多様性が、いかに観光客の景観において演じられているか」を明らかにするうえで「シンボリック景観」の視角が有効であるとしている。そこにはダンカンやコスグループの影響が強くみとれる。また大城直樹 (2014, 254-257) は「風景の消費は観光にとっていわば自明の当為である。ガイドブックや情報番組で目にした風景をみずからその場で確認したり、写真にそれを収めるという行為はごく当たり前の観光慣行である」としている。

これらの議論は、景観の消費的側面に着目したものであり、先のミッチェルにしたがえば景観の「生産」的側面に視野が及んでいないことになる。確かに、観光者は観光地内あるいは観光地間を移動することで、現前する景観を消費している。しかし他方で、観光者の行動は、景観の再形成に少なからず関わっている。観光者の目がガイドブックや情報番組で取り上げられた景観や景観要素にまず向けられることはあり得る。ただしその対象は、消費されることにより、さらに再整備 (再生産) されることもある。また、観光者が魅力を感じることで、その対象の再整備が進むこともあり得る。

台湾有数の観光地として、多くの日本人観光客が訪れる九份を例に考えてみよう。

九份はそもそも、日本統治時代に藤田組によって開発が始められた鉱山であった。藤田組自体は早々と鉱山開発から撤退してしまうが、経営を引き継いだ地元有力者の顔雲年が組織した台陽鑛業株式会社 (戦後は台陽鑛業有限公司) が 1974 年まで運営を継続していた。藤田組や台陽鑛業株式会社によって整備された鉱山施設の一部は、いまでも現地に残されている。それらの一部は、台湾の文化財として指定しない登録されている (表 1)。しかし、来訪者の目がそれらの文化財に向くことはまれである。そのなかで、日本人観光客の多くは、鉱山整備の一環で建設された階段で下から上を見上げるように写真撮影することを来訪の主目的としているようだ。その行為は、元々は台湾映画「悲情城市」の撮影スポットとして注目されたことに始まり、最近では宮崎駿の「千と千尋の神隠し」の舞台のモチーフになったと噂されたことによる。この点では、階段の景観は、来訪者による消費対象であるといえる (図 1)。

しかし来訪者の増加と特有のまなごしの存在は、地域住民による景観の再生産をもたらすことになった。まず「悲情城市」の撮影に用いられた建物は、現在では「悲情城市」という看板を掲げ、観光者が多く利用するレストランとして繁盛している。またその斜め向かいに建つ建物には、「湯婆婆の屋敷」と書いたポスターが貼られ、多くの観光者の写真撮影の対象となっている (図 2)。すなわち、観光地の景観は、なにも消費対象としてのみ存在するのではなく、観光者による「消費」と、地域住民や所有者など景観形成に直接的に関与する側による「(再) 生産」が展開する点に大きな特徴があるとみるべきである。

観光地景観の「(再) 生産」の側面に目を向けなければ、景観に内在し景観そのもののダイナミズムを具現する「変化、改変、異議申立」を明らかにすることができない。したがって、景観の消費的側面 (表象) と生産的側面 (社会的、経済的諸関係と実体としての景観) の両者に同時に目を配る研究視角が必要であるといえる。



図1 観光客が集まる九份の階段



図2 「湯婆婆の屋敷」

5. 観光景観の生産 金瓜石鉱山を例に

5-1. 観光景観学の構築

繰り返すが、景観は「常に生産の途上にあり、変化、改変、異議申立に開かれている」。またグラムシによれば、「ある特定のヘゲモニックな社会制度は永続的な事物の秩序ではなく、それは従属集団との交渉の末、イデオロギー的の定着への合意を獲得せねばならない」（ピーター・ブルッカー、2008: 213）。景観の生産論的研究において、藻掻、軋轢、衝突、共謀、交渉など、景観内部に生きる人々と環境との関係、アクター同士の関係が具現する行為が主題となる。そこで景観は、「権力、威圧、集団的抵抗によって形作られる、論争的でどっちつかずの社会的産物」（Zukin, 1991）であるといえ、またミッチェル（Mitchell, D., 1996: 95）によって「不公正な世界を自然化するよう作動」すると位置づけられ、ハーナー（Hamer, 2001, 662）によって「ヘゲモニックな文化の一部である」とされる。

景観は実体であると同時に表象でもある。それは、形態でありシンボルでもある、と言い換えることができる。すなわち、景観は、イメージであり、実際に生きられる状態でもあるのだ（Hamer, 2001: 663）。また景観の表象的側面は、ある特定の場所における物質世界の現実に対峙するものとして位置づけられる。もし、対立する社会集団が常に場所が抱える形態と象徴的意味を争うならば、それゆえにヘゲモニックなプロセスを経て社会空間と物理的な場所は再形成を余儀なくされる。したがって、景観は異なる社会関係が物質化したディスコースであるともいえる。

観光地におけるヘゲモニックなプロセスのひとつとして、「遺産化」(heritization)がある。「遺産化」とは、まず第一に、ある人々や組織（特に、国や市町村）が、ある特定の価値観によって重要とみなし、制度的に（時に、非制度的に）ある対象物を指定・登録するプロセス、およびその態度のことをいう。そのプロセスや態度においては、ある時代の歴史観（解釈）が作動し、その歴史観に基づく対象物の取捨選択という行為がなされる。そのため、ヒュイソンは遺産を、「非民主的であり、社会的、空間的不平等を覆い隠し、商業主義と消費主義をも覆い隠す。極端な場合は、本来保護されるべき建物や景観を改変したり破壊したりする」と批判する（Hewison, 1987）。

他方で、ある事物の「遺産化」は、その事物への観光客のアプローチを促進することになる。世界遺産登録のプロセスがもたらす観光客の増加はまさにその典型である。その遺産化にともなう観光客の増加が当該地域に様々な影響をもたらすことはよく知られている。白川郷においては世界遺産登録にともなう観光客の急増が景観の「悪化」と「改善」をもたらしたことが指摘されている（才津、2006、23-40）。また石見銀山では、構成要素のひとつである大森町において、世界遺産登録後の観光客の増加に対応するために、「暮らし」の維持こそが世界遺産の保全に繋がることを憲章で明示した。これらは、良かれ悪しかれ、遺産化に対する地域の行動であり、ある事物の遺産指定や登録に対して当該地域が無関心であることを想像するのは難しい。すなわち、事物の「遺産化」は、権力側の思惑（当然ながら、地域から要望によって指定登録が進められることもあり得る）としての指定・登録がある一方で、地域住民や観光客による遺産に対する実践が遺産の（再）構築を進めるといふ両者の相互作用に基づく空間や景観の再形成を指す。先に見た「悲情城市」や「湯婆婆の屋敷」はまさに観光客の動向を見据えた地域住民による空間的实践なのである。したがって筆者は、観光客を遺産の「消費」者と単に位置づけることはできないと考える。むしろ観光行動を遺産の「生産」プロセスに位置づけて考察する必要がある。

5-2. ポスト植民地鉱山におけるヘリテージツーリズムの実践

5-2-1. 金瓜石鉱山の遺産化プロセス

筆者は、こうした景観のヘゲモニックな状況が先鋭的にみられる現場のひとつとして、植民地において形成された鉱山景観およびポスト植民地の鉱山景観に着目している。植民地の鉱山とは、植民者と被植民者、および鉱山労働のために他国から渡ってきた人々の間で構築された社会的な領域であり、時に（あるいは常に）宗主国側によって強制労働が強いられた政治的空間でもある。すなわち、植民地鉱山とは、植民者と被植民者あるいはさらに異なる社会グループによる空間的相互交渉による景観の構築を通して政治と空間の関係が如実に示されていた場であり、その点に関する分析なしに植民地景観の社会空間的実態を理解することはむずかしい。むしろ、Yeoh（2003）が指摘しているように、植民地化事業と植民地化された世界を、互いに異なるものでありながらも重なり合い相互依存の関係にある領域として扱うことによってこそ、社会政治的影響を伴う物理的景観の形成と変容を明らかにすることができる。

ポスト植民地の鉱山とは、植民者によって開発された鉱山における脱植民地後の展開を指す。ここでは特に、閉山後の鉱山において、鉱山施設の遺産指定や観光再利用等によって地域の有り様が新たな方向性へ転回しているものを指す。鉱山施設の遺産指定は、当該地域における事業開発が歴史的価値をもつと判断されたことによる。その対象には、植民地下で開発されたものを少なからず含むことになる。そのため、ポスト植民地の鉱山においては、過去の施設は植民の表象であると同時に、現在までに残された自国の文化遺産として機能する。さらにそこに多様な社会グループが観光等を目的とする来訪者としてアプローチする。

台湾北東部にある金瓜石一帯は日本による台湾統治の開始後すぐに金山として有望視された地域で、台湾総督府は、その東側（後に「金瓜石鉱山」と名付けられる）を田中長兵衛（1858～1924）、西側（後に「瑞芳鉱山」と名付けられる）を藤田傳三郎に与えた（波多野、2015）。

以来、金瓜石鉱山は、田中長兵衛率いる田中組から、1925年に後宮信太郎（金瓜石鑛山株式會社を創設）、さらに1933年に日本鑛業株式會社へと経営権が移転した。戦後は、1955年に台湾金属鑛業股份有限公司が設立された。同社は新たに銅工場を設立するなど経営の多角化を行っていくが、負債が膨らみ1987年に閉山した。現在、金瓜石鉱山地域の土地は、台湾金属鑛業股份有限公司の負債処理を担った台湾糖業股份有限公司（以下、台糖と略す）と台湾電力股份有限公司（以下、台電と略す）の所有となっている。

金瓜石一帯の閉山後から現在に至る変容プロセスは、大きく3つの時期にわけて考えることができる。以下、それぞれの時期に起こった出来事と景観の関係についてみていく。

(1) 1980年代-本土化(台湾化)

戦後の台湾では、1949年に中国大陸から渡ってきた中華民国政府によって持ち込まれた政治や社会制度が採用されてきた。しかし、1970年代より、蔣経国によって台湾籍のエリートを政治面で登用する動きが「本土化」の名称とともに始められた。

さらに1987年の戒厳令解除以降の民主化によって本省人と外省人との政治的不平等が解消されていき、それに伴い1990年代以降、台湾文化の復権を目指す「本土化」が実践されるようになった(菅野、2009、227)。

こうした文化的本土化の動きのなかで、金瓜石鉱山は、隣接鉱山の瑞芳鉱山とともに「発見」されたといつてよい。洪瑞麟(1912-1996)や蔣瑞坑(1922-)などの画家によって金瓜石や九份の自然風景や鉱夫が働く現場が描かれ、大きな注目を集めた。また、玉音放送が日本による台湾統治の終わりを告げる場面からはじまり、中華民国が台湾に渡ってくるまでの台湾社会を描いた映画「悲情城市」(1989年公開)の監督である侯孝賢やその関係者は、設定した時代の景観や雰囲気を残した場所を捜していた。寂れた村落の景観、日本家屋の外観、畳が敷かれた室内空間を求める侯孝賢らは、台湾中を巡り、九份や金瓜石にたどり着いた(張静蓀、2011)。映画では、藤田組が瑞芳鉱山(現在、一般的に「九份」と呼ばれる)に建設した階段とそこに張り付く家屋群が台湾社会に蠢く人間関係を描き出す舞台、金瓜石鉱山に残る日本統治時代の理髪店は主人公が使用する店舗となり、また数人の男性による政治的な議論は畳の上に置かれたちゃぶ台を囲み、背景に床の間、掛け軸、襖など日本家屋の要素が配された室内でなされる。金瓜石や九份の景観要素は、古き台湾の姿として選択されたのである。

(2) 1990年代-観光商業地の形成とまちづくり運動

金瓜石や九份は、1990年代に入り、都市住民の日帰り観光地として注目され、まちづくり再開発が計画された。戒厳令が解除された1987年、15人の芸術家たちによる「九份藝術村」構想が、台北縣(現新北市)政府に提出された。この構想は、芸術家たちが住み着いて注目を集めていた1960年代から70年代のニューヨークSOHOを意識し、九份を舞台にアートの創作や展示のために鉱山施設を再利用し、観光の促進と文化産業の振興を目指したものであった。同構想は、彫刻を配した公園を建設するなど一定の成果を生み出したものの失敗に終わった。その後、1989年に九份に住み始めた芸術家の洪志勝が1991年に「九份茶坊」と名付けた茶芸館を開店することで、九份で茶を楽しむことがブームとなり茶芸館が増加するようになった。こうした過程のなかで九份を訪れる観光客は増加していき、地域住民においてはまちづくりへの機運が高まり、1993年に九份義工隊(翌年、九份文化協會となる)が組織された。

他方、1992年に日本統治時代の金瓜石鉱山における台湾人の生活を描写した映画「無言的山丘」(王童監督作品)が公開され、金瓜石が改めて注目を集めた。観光客が増加するなか、地域住民は1996年に「瑞芳觀光發展協會」、2000年に「黄金山城愛郷志工聯誼會」を組織し、町のあり方について考え始めた。

これらの動向を受け、經濟部(日本の経済産業省に相当)商業司は、2000年から2002年に、「九份、金瓜石商圈輔導計畫」を実施し、2001年に「九份商圈聯誼會」を設立することで、それまで個々に運

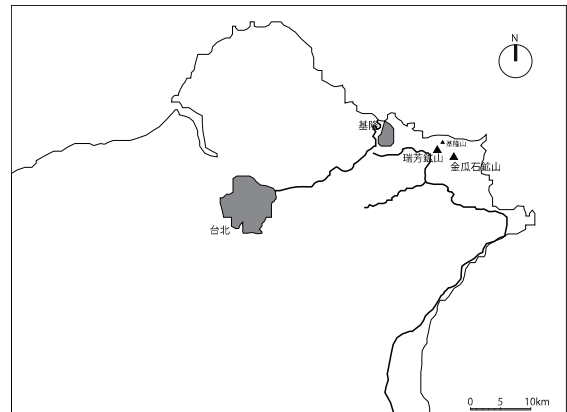


図3 金瓜石鉱山の位置

営されていた九份の商店をまとめ、組織的に九份の観光地づくりを推進していくための素地をつくった。

(3) 2000年代-地域の文化遺産化

金瓜石の地域住民は、1996年にまちづくりの一環で、「金礦博物館」の設立を計画した。その計画は1999年以降、台北縣による博物館建設計画に引き継がれ、台電等の土地所有者との土地利用に関する交渉が台北縣の主導のもと始められた。その結果、2002年に「台北縣立黄金博物館」がオープンした。

それと平行して、金瓜石と九份は文化遺産として再度注目されるようになった。その契機のひとつは、2003年に TICCIH (the International Committee for the Conservation of the Industrial Heritage、国際産業遺産保存委員会) が採択した「ニジニータギル憲章」にある。同憲章は、産業遺産の保護を促進するためのもので、以降、世界的に産業遺産の重要性が認識されるようになっていった。台湾においても2003年以降、特に九份・金瓜石の鉱山遺構を、指定もしくは登録していった(表1)。

さて、黄金博物館は、そもそもエコミュージアムの概念に基づき設置されたものである。エコミュージアムとは本来、ある一定の広がりをもつ領域(地域)において、点在する遺産を対象にし、住民自身がその管理運営を担うものである(大原一興、1999)。しかし黄金博物館の場合、博物館の「領域」は博物館施設に転用された鉱業事務関連施設が点在する小規模な範囲(図4の〈核心發展區〉)に限られ、日本統治時代に建設され現在も多く住民が生活する集落(図4の〈聚落振興區〉)や、鉱山本体や大規模製錬施設などが所在する範囲(図4の〈資源整備區〉)は博物館の「領域」外におかれている⁹⁾。すなわち、エコミュージアムであれば本来博物館の運営を担うはずの住民は、博物館設立の主導権を行政に奪われただけでなく、博物館そのものからも埒外とされてしまった。

他方、行政院文化建設委員會(文化部文化資産局の前身)は2003年、将来における世界遺産登録を前提に、台湾に現存する文化遺産および自然遺産のうち世界遺産登録の可能性のある遺産12ヶ所を「臺灣世界遺産潛力點」として正式に定めた¹⁰⁾。そのなかに、金瓜石と九份一帯70km²を地理的範囲とした「金瓜石聚落」(2011年、「水金九礦業遺址」に改称)が含まれている。そこで文化建設委員會と台北縣文化局は、2005年に文化資産保存法が修正公布されてから、金瓜石九份一帯を「文化景觀」としての保護するための対策を始め、2007年にコアゾーンとバッファゾーンを含む「文化景觀」範囲を描出に至った(中國科技大學、2007)。しかし2008年1月、登録された「文化景觀」は、「瑞芳鎮臺金濂洞煉銅廠煙道」(図5)と名付けられたもので、選鉱所・製錬所から排出される廃煙を山頂まで運ぶ煙道のみがその対象とされ、周辺環境すら包含されないものであった。

5-2-2. 金瓜石鉱山にみる景觀形成に関わるアクターによる空間的实践

金瓜石鉱山の景觀形成に関わるアクターは、それぞれどのような役割を果たしてきたのか。以下、アクターごとに、その立場と景觀との関係をみていく。

a. 文化部文化資産局(旧・行政院文化建設委員會)

世界遺産候補地としての金瓜石の研究やプロジェクトを指導する立場にある。同地の景觀形成に直接に関わることはなく、新北市文化局や新北市立黄金博物館が抱える研究プロジェクトの成果を評価する役割を担う。文化局や黄金博物館にとって、研究プロジェクトに対して国から支給される経費の増減は文化部文化資産局による評価にかかっており、その点で景觀形成において政策上の中心的立場にある。

表1 金瓜石・九份の文化資産

地域	類別	種類	名称	主管機関	管理/使用	所有		級別	公告日	
						土地	建築			
金瓜石	古蹟	その他	金瓜石神社	新北市政府	台灣電力公司	公有 (台灣電力公司)	—	直轄市定古蹟	2007/3/14	
		宅第	金瓜石太子賓館	新北市政府	台灣電力公司	公有 (台灣電力公司)	—	直轄市定古蹟	2007/3/14	
		その他	金瓜石礦業圳道及圳橋	新北市政府	新北市政府文化局	私有 (台糖公司) 私有 (台陽股份有限公司)	—	直轄市定古蹟	2005/8/11	
	歴史建築	宅第	金瓜石鑛山事務所所長宿舍	新北市政府	台灣糖業股份有限公司/ 新北市私立時雨高級中學	公有 (台灣糖業股份有限公司)	公有 (台灣糖業股份有限公司)	直轄市定古蹟	2015/1/14	
		産業設施	水清洞本山六坑口及索道系統	新北市政府	台灣電力公司/ 財政部國有財產署	公有 (台灣電力公司/ 財政部國有財產署)	—	—	2013/12/25	
		産業設施	水清洞選煉廠	新北市政府	台灣電力公司	公有 (台灣電力公司)	—	—	2007/3/14	
		文化景觀	工業地景	瑞芳鎮金濂洞煉銅廠煙道	新北市政府	—	—	—	2008/1/2	
九份	歴史建築	産業設施	台陽礦業園英坑	新北市政府	台陽股份有限公司	私有 (台陽股份有限公司)	—	—	2007/7/3	
		その他	瑞芳翁山英故居	新北市政府	洪志勝	台陽股份有限公司	洪志勝	—	2004/8/31	
		その他	台陽公司瑞芳辦事處歴史建築群 (招魂碑 (瑞芳鎮第19號公墓内)、八番坑 (瑞芳鎮豎崎路54號)、頌德碑 (瑞芳鎮輕便路 頌德公園内)、瑞芳辦事處 (瑞芳鎮豎崎路54號)、修路碑 (瑞芳鎮豎崎路54號))	新北市政府	台陽股份有限公司	台陽股份有限公司	台陽股份有限公司	—	2003/8/28	
		紀年性建築物	昇平戲院							2010/6/28

(<http://www.boch.gov.tw/boch/>、閲覧日：2016年5月20日)

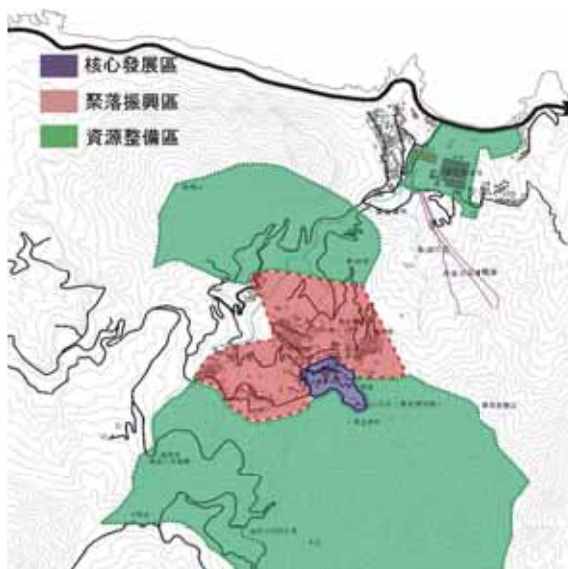


図4 黄金博物館の範囲 (新北市立黄金博物館提供)



図5 「瑞芳鎮臺金濂洞煉銅廠煙道」
(2007年7月29日撮影)

b. 新北市文化局

金瓜石・九份地区において指定もしくは登録されている文化財の管理責任をもつ。表1にあるように、金瓜石で古蹟3件、歴史建築2件、文化景觀1件は指定もしくは登録され、九份で3件の歴史建築関連、1件の紀年性建築物が指定されている。新北市政府は、それらすべての文化遺産の所有者・使用者に対して主管的役割を担う。

「文化景觀」の登録において、文化局は文化資産審議会を開催し学識経験者らとともに登録を決議する役割をもつ。「文化景觀」に登録された「瑞芳鎮臺金濂洞煉銅廠煙道」は文化資産審議会の場で登録が決定されたものであり、文化局自ら景觀概念を矮小化してしまっている。

c. 新北市立黄金博物館

黄金博物館は、新北市文化局の下部に位置づけられ、敷地内の建物の修復や景觀整備は原則文化局の意向によって決められる。また「文化景觀」が先の「瑞芳鎮臺金濂洞煉銅廠煙道」に限定されたことで、エコミュージアムとしての黄金博物館は、図4の「核心發展區」に対してのみ保護管理の責任を負っており、



図6 黄金博物館の建物 (2007年9月13日撮影)

その範囲の外部に対して建物の修復事業等が及びことはない。

博物館施設の建物は、そのほとんどが鉱山施設を再利用したものである。それらの外観デザインは当時の政府と建築事務所によって大きく変更されており、煉瓦造の建物の外観が下見板張り風にかえられている(図6)。日本統治後期に建設された日本家屋が周囲に残るなかで、博物館施設としての再利用が決まった戦後の建物を「日式」に変更し、景観の統一性を強化する意志を読み取ることができる。しかしそうした物質至上の景観再形成は、歴史的景観の真正性を大きく揺るがす結果となっている。

d. 新北市観光旅遊局

観光旅遊局は、風景特定区としての同地に対して、観光客に提供するための施設整備を推進する立場にある。黄金博物館の範囲内に対しては、施設整備の権利をもたない。しかし先述の通り、黄金博物館の範囲は本来の鉱山地域に対してかなり限定されており、本来一体的に保護されるべき場所に対して、黄金博物館による保護が及んでいない。そのため、観光旅遊局が黄金博物館の境界外部に整備している物見台などの施設は金瓜石の鉱山景観の変容に影響を与えている。

e. 外部研究機関(大学等)

黄金博物館の研究成果は、多くは大学等の研究機関や建築設計事務所への研究委託によって成り立っている。

f. 台湾電力公司(台電)と台湾糖業公司(台糖)

金瓜石の土地のほとんどは両社が所有している。戦後金瓜石鉱山の開発を担った台湾金属鉱業股份有限公司の財政破綻を受け、同地の管理を引き受けたためである。両社はこの地の土地のみならず日本鑛業株式会社や台湾金属鑛業股份有限公司によって建設された施設の所有者でもある。台電や台糖は土地や所有物件に対する所有者意識が高く、また鉱業権も保持している。

台電は、市の古蹟に指定されている金瓜石神社や太子賓館の所有者でもある。両物件は古蹟に指定されているため修理には市の許可が必要であるが、同社は幾度も許可をとらずに自ら修理を実施してきた。たとえば、日本鑛業株式会社が1930年代に建設した神社で、拝殿のコンクリート製柱や鳥居が残されている金瓜石神社に対して、近年、台電がその柱や鳥居の欠けた部分に対してセメントのようなものを充填してしまう事態が起こった。また太子賓館は大正期に皇太子が台湾巡行する際に利用する滞在所として建設された木造の日本家屋である。この建物は黄金博物館の主要施設のひとつとなっており、その敷地内は多くの訪問者で賑わう。2012年に、台電は、見栄えを良くするために、この建物の外壁に紫色のペンキを塗った。この事態はすぐさま黄金博物館を通して市の文化局に通報され、文化局は台電に対して塗り替えを命じた¹¹⁾。

台糖は、日本統治時代には来訪者の宿泊施設として、戦後は錬金施設として使用された建物を所有している。この建物は長期間にわたり放置されていたが、近年、台糖自らが修理と増築を行い、黄金博物館の施設として開放されるようになった。その際、同建物が文化財未指定物件であることから、修理や増築が台糖の意向に沿って実施され、建物の真正性を大きく損なう結果となった。

なお、両社は、黄金博物館との間で施設利用の賃貸契約を結ぶことが金銭収入を得ている。

g. 地域住民



図7 地域住民の店舗 (2007年9月13日撮影)
(タイル張りの舗装道路は黄金博物館の敷地内。建物は
その外側に位置する)

金瓜石全体を博物館にしていく構想は地域住民からあがったものであった。しかし先述の通り、台北縣政府が建設した博物館は、地域住民の意向が必ずしも反映されておらず、博物館運営にも地域住民が関与できない体制となった。この事態による地域住民の政府に対する不信感は大きく、現在も尾を引いている。

他方、博物館の運営から閉め出された地域住民の一部は、博物館の公開当初、博物館との境界に店舗を設置し、博物館側に向かって入口を開いた(図7)。それは、政府による地域住民の空間的排除に対する空間的対抗関係を構築すべく行った行為といえる。ただし、その空間形成行為は、黄金博物館が歴史的連続性や景観の重層性を考慮せず実施した下見板による外観デザイン

の変更と同様、同地の真正性を消失しかねない重大のものと考えられる。

また地域住民が日常生活を送る土地や住居の大半は台電・台糖の所有物であり、地域住民は毎年多額の賃貸料を支払う義務を負っており、両社と地域住民の間には軋轢が生じている。その軋轢は地域住民の町に対する無関心を引き起こし、多くの家屋が廃墟化する事態が起こっている(中國科技大學、2009)。

h. 博物館ボランティア

博物館エリアで観光客の案内を任されているのは、博物館による教育を受けたボランティアである。ボランティアは各施設の入口付近に立ち観光客の入場を促すようなコントロール業務を行う一方で、個人や団体を対象としたガイド活動も行っている。ガイドは、中国語のほか、日本語や英語にも対応している。ボランティアは、博物館から委託を受けた研究機関が作成した研究報告書や専門家による講義を通して、当地の鉱山としての歴史や、歴史的建造物の建築的特徴などの知識を獲得していく¹²⁾。

ボランティアガイドは、当地の鉱山景観と観光客を媒介する役割を担っていると言える。しかしボランティアの多くは金瓜石の外部に居住しており土地との濃密な関係性をもたない¹³⁾。したがって、金瓜石の景観は、地域住民不在のなかで理解され、客観的かつ物質的存在として定位されていくことになる。

i. 観光客

黄金博物館の年間来場者数は、台湾の所在する博物館のなかでも最も多い。台湾のほか、日本や韓国からの観光客も多い。観光客はガイドマップを片手に博物館施設を巡ることになり、その過程で、鉱山の歴史を展示物によって学んだり、実際に使用されていた坑道を体験することができる。しかし観光客の多くは、前掲の博物館中心エリア(図3の「核心發展區」)のみを観光し、その外部を巡ることはほとんどない。したがって観光客のまなざしは、博物館そのもののみに向けられ、鉱山全体には向けられていないのが実態である。

金瓜石一帯は「本土化」によって古き台湾を残す地域として注目され、1990年代には過疎化が進むなかで住民によるまちづくり組織がつくられ、住民主体の地域再編が住民自身によって企図された。しかし台北縣による空間限定的な博物館の建設や企業の所有者意識は、地域住民が地域景観の保護や形成に主体的に関与する機会を失う契機となってしまった(図8)。その結果、各アクターが景観価値に対する意識の共有がないままに個別に景観保護や形成に関わることになり、遺産としての真正性が不安定

な状態に陥ってしまっている。景観には多くのアクターが関わっているものの、発言権が平等に付与されているわけではないことがわかる。また景観という平面上に各アクターが点在し、互いに関係を取り結んでいるにも関わらず、その関係は決して平面的ではない。

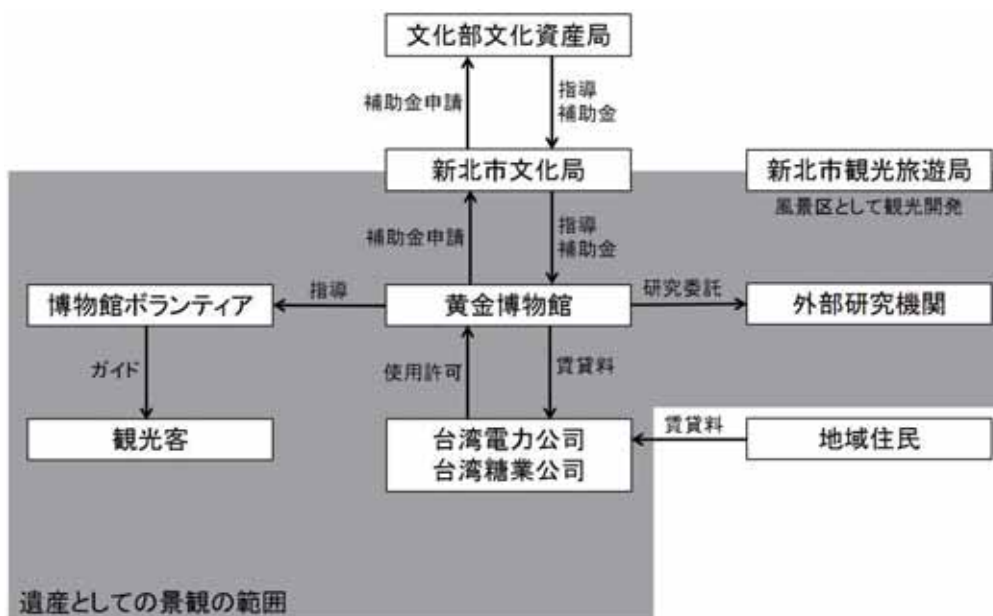


図8 遺産としての景観におけるアクター間の関係

6. おわりに

これまで、観光者、地域住民、商店主など観光地の形成に関わるアクターの多様な行為が（再）形成する景観、さらには景観によって惹起するアクター間の行為、に焦点を当てその実態を明らかにする学問としての「観光景観学」の可能性について考えてきた。

金瓜石の事例は、景観要素の遺産化にともなって惹起した観光行動を単なる消費的行為とみなすことはできないことを明らかにしている。観光がもたらす景観の（再）生産は、自明の当為とあってよいだろう。観光とそれに対する地域の対応は、景観を常に変化に途上におく。景観が単なる物質的存在ではないことことを踏まえると、観光客の動向やそれに対する地域の対応がもつ物理的側面と理念的側面、および観光地の景観は否応なしに相互作用の関係にあり、それうえに観光行動は決して景観の消費に留まるものではない。むしろその観光行動から生み出させる景観の生産性を同時に分析していかない限り、観光地の景観の本質には迫れないといえよう。

注

- 1) 昨今の地理学では、前者を「景観」、後者を「風景」とする考え方が多い。
- 2) 本章本段落以降の議論は、波多野（2016）の一部を改変したものである。
- 3) 馬祖島については、波多野（2010、17-34）、金門島については波多野（2016、29-46）を参照。
- 4) 景観の「変容」と「変化」については、波多野（2016、29-46）を参照。

- 5) それをインゴールドは「タスクスケープ」という。
- 6) 景観をパリンプセストと捉える向きは、イギリスの地域史を専門とする W.G. ホスキングズ (2008) に始まると考えられる。
- 7) ここでいう「戦略」とは、ミッシェル・ド・セルター (1987,100) がいう「ある意思と権力の主体が、周囲から独立してはじめて可能になる力関係の計算 (または操作)」に相当する。
- 8) ダンカンら景観テキスト論者とマルクス主義唯物論者との間の論争については、今里 (2006) に詳しい。
- 9) 図 4 は、2007 年に当時の館長 (王騰崇) によって描かれたもので、実際に博物館の「領域」が再度画定されるには至らなかった。
- 10) 現在は、18ヶ所に増加している (http://twh.boch.gov.tw/taiwan/index.aspx?lang=zh_tw、閲覧日：2016年5月9日)。
- 11) 黄金博物館の林慧如学芸員に対するヒアリングによる (2014年11月27日に実施)。
- 12) 同上。
- 13) 同上。

参考・引用文献

- アーリ (吉原直樹監訳)、2006、『社会を越える社会学-移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局：238.
- 今里悟之、2006、『農山漁村の〈空間分類〉-景観の秩序を読む』京都大学学術出版会 .
- 大城直樹、2014、「第 8 章 風景」、大橋昭一他『観光学ガイドブック』ナカニシヤ出版：254-257.
- 大原一興、1999、『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会 .
- 菅野敦志、2009、「台湾における『本土化』と言語政策-単一言語主義から郷土言語教育へ」『アジア太平洋討究』No.12.
- 才津祐美子、2006、「世界遺産の保全と住民生活-「白川郷」を事例として」『環境社会学研究』No.12：23-40.
- D. マキヤネル (安村克己他訳)、2012、『ザ・ツーリスト-高度近代社会の構造分析』学文社 .
- W.G. ホスキングズ (柴田忠作訳)、2008、『景観の歴史学』東海大学出版会 .
- 本中眞、2009、「国内外の文化的景観に関する最近の動向」『ランドスケープ研究』Vol.73、No.1：9.
e-Gov： <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S25/S25HO214.html>
- 波多野想、2010、「馬祖文化景観的風険管理性經營-變遷志向與景観經營系統的開發」傳朝卿編『世界遺産與地方保存』福建省連江縣政府：17-34.
- 波多野想、2015、「明治 30 年代瑞芳及金瓜石礦山之設施與空間配置的實狀態」『黄金博物館學刊』：50-70
- 波多野想、2016、「第 2 章 台湾・金門島にみる文化的景観のダイナミズム」琉球大学国際沖縄研究所「新しい島嶼学の創造」プロジェクト編『島嶼型ランドスケープ・デザイン-島の風景を考える』沖縄タイムス社：29-46.
- ピーター・ブルッカー (有元健・本橋哲也訳)、2008、「ヘゲモニー」『文化理論用語集』新曜社：212-213.
- 文化的景観学検討会、2016、『地域のみかた-文化的景観学のすすめ』独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 .

- ミシェル・ド・セルトー (山田登世子訳)、1987、『日常の実践のポイエティック』国文社。
- 張靜蓓、2011、『凝望・時代：穿越悲情城市二十年』田園城市。
- 中國科技大學、2007、『文化景觀保存哲學及國際案例比較研究計畫』文化建設委員會。
- 中國科技大學、2009、『水滄洞選煉廠遺址及其周邊設備文化景觀研究調查案』台北縣立黃金博物館。
- Antrop, M., 1997, The concept of traditional landscapes as a base for landscape evaluation and planning. The example of Flanders Region, *Landscape and Urban Planning* 38 : 105-117.
- Cosgrove, D. E., 1984, *Social Formation and Symbolic Landscape*, Croom Helm Ltd.
- Duncan, J. S., 1990, *The City as Text: the politics of landscape interpretation in the Kandyan kingdom*, Cambridge University Press.
- Harner, J., 2001, Place Identity and Copper Mining in Sonora, Mexico, *Annals of Association of American Geographers*, 91(4) : 660-680.
- Hewison, R., 1987, *The Heritage Industry*, Methuen Publishing Ltd.
- Ingold, T., 1993, The temporality of the landscape, *World Archaeology*, Vol.25, No.2 : 152-174.
- Knudsen, D C., Soper, A. K., and Metro-Roland, M. M., 2008, *Landscape, Tourism and Meaning: An Introduction*, Knudsen, D C., Metro-Roland, M. M., Soper, A. K., and Greer, C. E., *Landscape, Tourism, and Meaning*, Ashgate : 1-7.
- Mitchell, D., 1994, Landscape and Surplus Value: The Making of the Ordinary in Brentwood, California, *Environment and Planning D: Society and Space*, 12 : 7-30.
- Mitchell, D., 1996, Sticks and Stones: The Work of Landscape, *Professional Geographer*, 48(1) : 94-96.
- Wylie, J., 2007, *landscape*, Routledge : 153-157.
- Palang, H. and Fry, G., 2003, Landscape interfaces, Palang, H. and Fry, G (eds.), *Landscape Interfaces*, Dordrecht, Kluwer Academic Publishers : 1-13.
- Schein, R. H., 2003, Normative Dimensions of Landscape, Wilson, C. and Groth, P. (eds.), *Everyday America: cultural landscape studies after J. B. Jackson*, University of California Press : 199-218.
- Yeoh, B., 2003, *Contesting Space in Colonial Singapore: Power Relations and the Urban Built Environment in Colonial Singapore*, Singapore University Press.
- Zukin, S., 1991, *Landscapes of Power: From Detroit to Disney World*, University of California Press.